

教育実習の事前指導と学生の学びに関する調査研究

柴田 俊和¹⁾ 深津 達也¹⁾

Study of Pre-service Education and Self-Evaluation in Practice Teaching at Biwako Seikei Sport College

Toshikazu SHIBATA Tatsuya FUKATSU

Abstract

At Biwako Seikei Sport College, about 60 percent of students experience practice teaching to acquire a teacher's certificate every year. The purpose of this study is to obtain the data for examining and improving the contents and the method of the teacher training-related lesson in a university, or practice teaching prior to instruction by understanding the actual condition of learning and the change of a self-valuation result in student's practice teaching.

1. Actual Condition of Learning in Practice Teaching

In order to discover the actual condition of a student's learning in practice teaching, a question paper investigation using the following free descriptions was conducted.

- (1) What did you think you would study by practice teaching?
- (2) What did you notice by actually experiencing a lesson?
- (3) What did you master through practice teaching?
- (4) The subject of research after practice teaching?
- (5) A university lesson which was helpful for practice teaching?
- (6) Something you studied in a university lesson before practice teaching?
- (7) Comment which let the whole practice teaching pass

It became clear from students' description to have studied many things in practice teaching. Moreover, in the lesson of a university, it also became clear before practice teaching .

2. About Change of Self-Evaluation Result in Practice Teaching

The Self-Evaluation paper of practice teaching was distributed to students prior to instruction of practice teaching. The evaluation result was submitted after the end of practice teaching was totaled, and was considered as the data of consideration. By this study, the results have improved the contents and the method of practice teaching prior to instruction was able to be checked. However, furthermore, it became clear that it is also necessary to improve. Also in order to solve the problems pointed out by the evaluation comments from the school for practice teaching, it is necessary to do this research continuously.

Key words : Pre-service Education (教育実習事前指導) , Learning of Practice Teaching (教育実習での学び) , Self-Evaluation (自己評価)

1) 生涯スポーツ学科

1. はじめに

平成24年8月28日に、中央教育審議会の教員の資質能力向上特別部会が平成22年6月より審議を続けていた「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(文部科学省, 2012)を答申した。この中では、「現状と課題」の「これからの教員に求められる資質能力」において、「これからの社会で求められる人材像を踏まえた教育の展開、学校現場の諸課題への対応を図るためには、専門職としての高度な知識・技能として、教科や教職に関する高度な専門的知識と新たな学びを展開できる実践的指導力(基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探求型の学習、協働の学びなどをデザインできる指導力)を有する教員が必要である」と述べられている。

本学で平成22年度から活用している教職ハンドブックは、平成25年後期から実施される教職実践演習に対応したもので、その中で本学の教員養成のポリシーとして、「本学では、子どもや保護者、同僚から信頼される、人間的にも教職の専門家としても優れた人材を育てたいと考えている」と示している。さらに、「知徳体のバランスのとれた教養豊かな教員」、「教育者としての使命感や子どもに対する教育的愛情豊かな教員」、「子どもの成長・発達を保障する専門性豊かな教員」、「得意分野を持つ個性豊かな教員」を本学の教職教育を通じて育てたい教師像として示している。

本学において上述のような教師像を目指す基礎的な素養を身に付けた学生を送り出すために、教職科目の単位認定に際して出席基準(80%以上の出席)を設けたり、「教育実習」や「介護等体験」に参加するために7科目のゲート科目を設定し、3年前期終了時にゲート科目を履修できていなければ、4年次の

「教育実習」や3年次の「介護等体験」には参加することができないというハードルを設けている。しかし近年、ゲート科目の履修忘れや単位不認定の学生が急増しており、安易な気持ちで教員免許状を取得しようと思っている学生を少しでも減らすために、教職課程委員会と教務課が協力して、1年次生から教員免許取得に関するオリエンテーションなど、学年に応じた様々な説明会を実施している。また、本論中に示すような教育実習校からの評価コメントに対処するための方策として、それ以前は4年生の4月に5日間で集中して実施していた教育実習指導の前半内容である教育実習事前指導を、平成22年度から3年次の後期に11コマで週1回の授業枠を設けて、教育実習参加者全員を対象とした模擬授業実践を必修とする形式に変更して実施しており、4年次4月には2日間の直前指導も行っている。

びわこ成蹊スポーツ大学において、毎年6割程度の学生が教員免許状を取得するために教育実習に臨んでいる。教育実習に際して、学生たちが、何を求めて実習に参加し、実習を経験することで何に気付き、どのようなことに困難を感じ、実習を通して何を身に付け、実習に際して大学の授業にどのような不足を感じたのか、実習後に何を学ばなければならないと考えたのかなどの学びの実態を知ることが、教職科目や教科に関する科目、教育実習事前指導等の授業内容や方法の検討・改善に貴重な資料を提供してくれると考える。また、今後、導入の検討が必要と考える教育実習における指導と評価の一体化への対応として、実習校で行われる実習評価の評価項目や評価基準と同様の視点で実習生本人が行う自己評価が、東京学芸大学で平成19年度から実施されている(東京学芸大学, 2007)。この自己評価は、筆者の前任校で教育実習に臨む学生たちにとっては、どのような観点や評価基準と基準で自分の実習成果が評価されているのかを理解でき、実習期間を通じた自

己の変容を具体的な観点で評価することにより、改善努力すべき事項を明確に自覚できる点で好評であった。そこで、本学の教育実習において使用されている評価用紙の評価項目・観点とはかなり異なった評価項目であるが、試みに東京学芸大学で使用されている調査用紙（資料1参照）を利用して、平成20年度から本学の教育実習において実習中間時と終了時の学生自身による自己評価を試行してきた。

教員養成系大学における附属学校や実習協力校での教育実習では、指導を担当する学校と大学の教員間での事前打ち合わせや事後反省会等を持つことができる。しかし、本学のように学生の出身校である母校での教育実習をお願いしている大学では、実習現場での実習生の実態を知ることができる機会や資料は実習期間中の学校訪問と実習後に送り返されてくる教育実習評価票のみである。この評価票を通して実習校から求められる課題や学生の問題点への対応だけでなく、実際に実習現場で苦勞している学生の声にも耳を傾けて、大学での教員養成に関する授業の改善に取り組んでいく必要があると考えている。

筆者は平成20年度の本学研究紀要において、「教育実習における学生の学びと自己評価の現状及び課題」と題する研究報告（柴田ほか、2008c）を行った。それぞれの母校において教育実習に参加させていただいた学生たちは、実に多くのことを学ばせて頂き、各自の今後の学修すべき課題を明らかにすることができたとレポートに示した。また、実習の現場において、さらなる成果を達成するためには、実習に参加する以前の大学での学びにおいて、いくつかの要望を示していた。更に、教育実習校からの評価用紙に書かれていた本学に対する要望として、事前指導のみならず教科に関する科目（実技等）での指導の充実を求める内容も少なからず書かれていた。しかしながら、この研究報告では、教育実習における学びに関する調査対象者が29

名、教育実習での自己の変容に関する自己評価の調査対象者が84名と、平成20年度の教育実習参加者144名に対して回答者の割合が低く、本学学生の教育実習における学修実態を示すにはデータ不足であったと考えている。

また、前述のように平成22年度から教育実習事前指導の実施形態と指導内容を大きく改善したため、平成23年度の教育実習参加者からは、それ以前の学生とはかなり異なった実習成果が示されるようになったのではないかと考えている。教員免許状取得に関する1年次生からの指導や改善された教育実習事前指導の成果が、どのような形で学生達の教育実習での学びに反映しているのかを明らかにする必要があると考えた。

本研究の目的は、平成20年度に実施した研究と同様の調査方法を用いて、本学学生の教育実習における学びの実態や実習中の自己評価結果の変容を捉えることにより、大学での教員養成関連の授業や平成22年度から改善された教育実習事前指導の内容や方法の成果を検討し、さらに今後の改善資料を得ることにある。

2. 教育実習における学びの実態

2.1. 調査の方法

教育実習における学生たちの学びの実態を捉えるための資料として、実習終了後に7項目の質問で構成した記述式のレポートを提出させ、回答を集計考察した。レポート提出者数は、平成20年度は教育実習参加者144名中29名（回収率20.1%）、平成23年度は参加者176名中146名（回収率83.0%）であった。

2.2. 調査の内容

記述式レポートの質問は、以下の7項目である。

- ①今回の教育実習期間を通して、あなたが学ぼうと思っていたことは何ですか
- ②教育実習の現場で、授業をやって初めて気がついたことは何ですか

- ③今回の実習を通して、あなたの身に付いたと思うことは何ですか
- ④教育実習を終えた現在、あなたの勉強の課題は何ですか
- ⑤大学で学んだことの中で、今回の教育実習で役立ったことは何ですか
- ⑥大学の授業において、教育実習以前に学んでおきたかったことは何ですか
- ⑦教育実習全体を通しての感想、および後輩の3年生に伝えておきたいこと

2.3. 実習で何を学ぼうと思っていたか

「今回の教育実習期間を通して、あなたが学ぼうと思っていたことは何ですか」という質問に対する主な回答は、表1の14項目であった。平成20年度の集計では、調査対象者が少なかったため、記述された内容を、①大学

の授業との関わり、②教員という仕事や生徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視点で分類して集計した。本研究では、調査対象者数が多いため、平成20年度に得られた回答(柴田・古川, 2008)をもとにして設定した14項目の回答例に対して、記述された内容からキーワードを読み取り、14項目に対応させて集計したため、複数回答になっている。項目15はその他として、具体的内容を示した。

この質問に対する回答は、実習終了後に書かれたレポートであったため、実習を経験したことにより実習前に考えていたことから若干変化している可能性があると思われる。しかし、実際に学校現場に行かなければ体験できない内容が多く記述されており、平成23年度の学生たちも、前回調査で示された項目に該当する回答が多かった。回答の傾向としては、「教員という仕事や生徒理解に関して」の

表1. 今回の教育実習を通して、あなたが学ぼうと思っていたこと

| | 人 | 割合 |
|--|----|-------|
| 1 大学の講義ではわからない真の教育現場の現状を知る | 21 | 14.5% |
| 2 大学で学んだことを実際の現場で試したい | 8 | 5.5% |
| 3 大学で学んだ教師像と実際の教師像の違いを捉え、自分なりの教師像を作る | 3 | 2.1% |
| 4 生徒と関わることで教師としての自分を発見する | 18 | 12.4% |
| 5 教師という仕事はどのようなものを学ぶ | 44 | 30.3% |
| 6 教師や生徒との関係の築き方を学ぶ | 10 | 6.9% |
| 7 体育教員の一日の流れ、授業の進め方の工夫を学ぶ | 34 | 23.4% |
| 8 生徒とのかかわり方やコミュニケーションの方法を学ぶ | 48 | 33.1% |
| 9 学校の仕組みや実際の授業の様子を知る | 12 | 8.3% |
| 10 指導案を含め、授業展開の仕方を学ぶ | 18 | 12.4% |
| 11 生徒がどのような授業をおもしろく思えるのかを探る | 4 | 2.8% |
| 12 どのような目標を立てて授業を行っていくのかを知る | 4 | 2.8% |
| 13 授業を展開するために必要な技術や知識を知る | 12 | 8.3% |
| 14 生徒がどのように授業に取り組んでいるのか実態を知る | 14 | 9.7% |
| 15 その他 | 15 | 10.3% |
| (その他に記述された内容) | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・教師という目で見えた学校の雰囲気 ・教師にとって大切な授業力を身に付けたい ・部活の指導をやってみたい ・言葉で伝えることや教えることの難しさを体験する ・いじめの実態を知る ・学級経営と特別支援教育の実際 ・クラス運営の方法を学ぶ ・教員を目指していなかったが、大勢の人の前に立って何かを話すことやわかりやすく教えることを通して、今後自分が社会に出た時に役立つことを学ぼうと思った。 ・クラブ活動の指導 ・人前で話をすることを学びたい ・発達段階を考えた指導を体験したいと思った ・女子校の実態 ・説明力を付けたい ・先生や実習生との関わり方 ・人前で話せるようになること | | |

分類に当てはまるものが多く、教師という仕事を知ることと生徒との関わり方（コミュニケーション）の方法を学ぶが3割で、大学の授業では直接学ぶことができない事柄を学ぶと考えていた学生が多いことがわかる。

2.4. 現場で授業を行って気付いたこと

「教育実習の現場で、授業をやって初めて気がついたことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。平成20年度の集計では、記述された内容を、①大学の授業との関わり、②教員という仕事や生徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視

点で分類して集計した。本研究では、平成20年度に得られた回答をもとにして設定した15項目の回答例に対して、記述された内容からキーワードを読み取り、項目に対応させて集計した。結果として複数回答になっている。項目16はその他として具体的内容を示した。

ここでの回答をみると、「学校スポーツの理論と実際」や「教育実習事前指導」および「学校スポーツ専門実習Ⅰ・Ⅱ」の模擬授業で経験した授業と、多種多様な生徒を相手にして現場で行う実際の授業との本質的な違いを明確に感じ取れたようである。また、学ぶ側にいた時には考えなかったような、生徒の興

表2. 教育実習の現場で、授業をやって初めて気付いたこと

| | 人 | 割合 |
|---|----|-------|
| 1 指導案通りに授業を進めることが必ずしも良い授業とは言えないこと. | 20 | 13.8% |
| 2 授業で一番大切なことは生徒の反応に臨機応変に対応すること. | 14 | 9.7% |
| 3 良い授業は、単元や1時間の授業で伝えたいことを生徒にしっかり理解させること. | 13 | 9.0% |
| 4 細かく指示しなければ生徒は動いてくれないこと | 22 | 15.2% |
| 5 大学の模擬授業で上手くできても、実際の生徒は多様で上手く動かせないということ | 5 | 3.4% |
| 6 学年の中でも相当できる子とできない子、やろうとしない子の差がはっきりとして | 17 | 11.7% |
| 7 教師として授業を見る・するという違う視点から見た授業の新鮮さと運営の難しさ | 9 | 6.2% |
| 8 自分が理解していてもその内容を生徒に伝えることの難しさ | 41 | 28.3% |
| 9 教材研究を十分にやって自信を持って授業に臨む事が大切 | 29 | 20.0% |
| 10 人に教えたり学習させるためには勉強不足だった | 18 | 12.4% |
| 11 話術の難しさや生徒を引き付ける話題づくりの難しさ | 11 | 7.6% |
| 12 50分の授業で伝えられ事は1つか2つであること | 5 | 3.4% |
| 13 板書計画の重要性 | 6 | 4.1% |
| 14 全体を見ながら個々の生徒を見ることの難しさ | 10 | 6.9% |
| 15 集団行動の指導と安全管理の重要性 | 17 | 11.7% |
| 16 その他 | 31 | 21.4% |
| (その他に記述された内容) | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・50分の授業を展開することの難しさ ・授業準備には10分間の休み時間は短すぎる ・声の大きさ ・生徒はしっかりと教師の様子を見ているということ ・30人の生徒を動かす事の難しさ ・声が小さいこと ・クラスの雰囲気や生徒の性格に合わせてかわり方を変えることの重要性 ・子ども達の感受性の豊かさ ・子どもの体力低下と精神的幼さ ・現場の先生の授業展開の上手さとすごさ ・運動を教えることの難しさ ・生徒親の重要性 ・時間通りに生徒を動かすことの難しさ ・できない生徒を教えることの難しさ ・運動量の確保の重要性と発問後解答後の生徒のフォローの大切さ ・生徒の授業への期待の大きさ ・小学生と高校生に対する指導の違い ・生徒の視点で考えることの大きさと難しさ ・声掛けの大切さ ・授業における教師はとても孤独だということ ・生徒とのコミュニケーションの難しさ ・授業の難しさ ・先生って凄いなあという実感 ・生徒の反応の無さ ・コミュニケーションの重要性③ ・現場の忙しさ ・授業をするために自分の人生経験が必要だということ ・子ども達のレベルに合わせることの難しさ ・クラスによって違いが大きいこと ・クラスによって授業展開を変える必要があること ・発問の大切さ ・生徒との信頼関係と褒めることの大切さ ・クラスや学年によって授業の態度が違うこと ・板書の難しさ | | |

味や能力の多様性とそれへの対応の難しさにも気づいている。さらに、授業運営の難しさや教材研究を含む事前準備の大切さも痛感したようである。自分が理解していてもうまく生徒に伝えられないという経験も重要な学びである。

このような現場での実習体験を通して気づいたことを確実に学習させるためにも、来年度から教職必修として実施する教職実践演習の具体的な内容と実施方法について、早急に検討し、決定することが現在の最重要課題である。

2.5. 実習を通して何を身に付けたのか

「今回の実習を通して、あなたの身に付い

たと思うことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。平成20年度の集計では、記述された内容を、①教員という仕事や生徒理解に関して、②授業に関して、の2つの視点で分類して記載した。本研究では、平成20年度に得られた回答をもとにして設定した14項目に対して、記述された内容からキーワードを読み取り、14項目に対応させて集計した。結果として、複数回答になっている。項目15はその他として、具体的内容を示した。

以下のような回答から、学生たちは3週間の実習を通して、教師という仕事の難しさとそこで何が必要なのかを十分に感じられたようである。また、授業に関しては、内容や方

表3. 今回の教育実習を通して、あなたの身についたと思うこと

| | 人 | 割合 |
|---|----|-------|
| 1 教師としての姿勢や態度、礼儀、言葉使い、授業準備の重要性と必要性 | 19 | 13.1% |
| 2 根気と忍耐力、臨機応変に対応する力、実践力 | 10 | 6.9% |
| 3 教師の仕事の多さと大変さ、教員としての責任感や達成感 | 11 | 7.6% |
| 4 学ぶ姿勢、指導教諭の助言や指導を自分で考え取り入れること | 2 | 1.4% |
| 5 自分の思っていることを生徒にしっかり伝える力、伝わっているかは別で | 30 | 20.7% |
| 6 1つのことに対する追究心 | 1 | 0.7% |
| 7 集団を動かす力 | 10 | 6.9% |
| 8 安全面に配慮した授業 | 3 | 2.1% |
| 9 教材教具を工夫する力 | 5 | 3.4% |
| 10 自信を持った堂々と話すこと、指示すること、しかること | 31 | 21.4% |
| 11 自分自身を客観的に見られるようになった | 4 | 2.8% |
| 12 1時間で生徒に何を伝えたいか、教えたいかをつかめるようになった | 13 | 9.0% |
| 13 生徒全体に目を配りながら生徒ごとに対応できるようになった | 18 | 12.4% |
| 14 生徒への言葉がけ、生徒とのかかわり方 | 31 | 21.4% |
| 15 その他 | 35 | 24.1% |
| (その他に記述された内容) ・何事も早めに準備しておくことの大切さ ・事前の準備を大切にすること ・準備の大切さ ・コミュニケーション能力 ・教材研究の大切さを理解した ・今まで以上に周りに気を配る事 ・授業力④ ・事前にシミュレーションをしっかりとってから本番に臨む姿勢 ・大きな声を出す事 ・学級経営の知識と技能 ・授業中の立ち位置 ・勉強不足 ・できない生徒への課題の与え方 ・板書や授業運営の工夫の大切さに気付かされた ・生徒の気持ちを感じる力② ・笛の使い方 ・指導におけるメリハリの重要性を学んだ ・生徒への興味や指導に対する関心が高まった ・決断力 ・自分自身を客観的に見つめる姿勢が身についた ・生徒の発言から授業を展開する力 ・常に誰かから見られているという緊張感を持てるようになった ・素早く環境に慣れること ・生徒の授業に打ち込む姿から多くのことを学べた ・事前に次の行動を把握しておくことの重要性 ・女子生徒とのコミュニケーションの大切さ ・時間配分と時間の使い方 ・改善する力 ・子ども達に寄り添うこと ・クラス運営の方法 ・施設の使い方がわかった ・積極性 | | |

法が重要なのではなく、目的やねらいの重要性に気づけたようである。さらに、指導案通りに授業運営するだけでなく、その場の状況に応じて臨機応変に対応できることの必要性にも気づいたようだ。これらのことは、大切にしたい彼らの学習成果である。ただ、実習以前に大学の授業において学ばせておくべき内容も気づきの中にも含まれており、事前指導を含む実技等の指導内容を検討する必要があると感じている。

2.6. 実習後の勉強の課題

「教育実習を終えた現在、あなたの勉強の課題は何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。平成20年度の集計では、記述された内容を、①大学の授業との関わり、②教員という仕事や生徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視点で分類し

て集計した。本研究では、平成20年度に得られた回答をもとにして設定した14項目を枠組みとして、記述された内容からキーワードを読み取り、14項目に対応させて集計した。結果として、複数回答になっている。項目15はその他として、具体的内容を示した。

ここでの回答には、学生個々の実習結果の反省として考えた事柄が示されている。学校現場で生徒を前にして授業を経験した結果、自分の専門種目以外の運動種目を教えたり、保健の教科書に書かれている内容をわかりやすく教えたりするためには、自分の専門的知識があまりにも不足していることに気付いた結果が回答に示されているようである。また、生徒や実習校の先生方との対話において、自分の知識や経験の少なさに気付いた結果でもあると考えている。大学での幅広い領域での学修の必要性、教員として必要な経

表4. 教育実習を終えた現在、あなたの勉強の課題は

| | 人 | 割合 |
|---|----|-------|
| 1 実技の専門種目以外の知識や指導法を学ぶ | 40 | 27.6% |
| 2 会話の仕方、上手な話し方 | 18 | 12.4% |
| 3 卒業までの間に勉強や卒業論文に真剣に取り組むこと | 8 | 5.5% |
| 4 長期的な流れを考えた上での指導が行えること | 3 | 2.1% |
| 5 授業の内容のレポトリーを増やすこと | 9 | 6.2% |
| 6 授業運営の方法と専門的な知識 | 37 | 25.5% |
| 7 教育に必要な心理学や教育学の知識を身につけること | 7 | 4.8% |
| 8 剣道や柔道など今までに経験したことのない種目をやってみること | 1 | 0.7% |
| 9 自分に足りない部分が無限あると感じたので全てを学びたい | 23 | 15.9% |
| 10 気持ちの面でもう少し教師像をまとめる必要がある | 3 | 2.1% |
| 11 生徒に話を聞いてもらうために経験や力を付けること | 13 | 9.0% |
| 12 目的を達成するための学習方法 | 6 | 4.1% |
| 13 指導案の書き方と教材研究 | 19 | 13.1% |
| 14 できない生徒をどうやって教えるか | 13 | 9.0% |
| 15 その他 | 56 | 38.6% |
| (その他に記述された内容) | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・保健や雑学の知識を得ること④ ・教科や特別支援教育に関する専門的な教養を身につける ・最低限の専門教科に関する知識を増やす事⑥ ・全ての種目で見本を見せられるようになること② ・ボランティアやスクールサポーターで現場での経験を積むこと(株) ・一般教養や教職教養呼 ・多くの先生の授業を見学すること③ ・言葉や知識を増やすこと ・新聞を読むこと ・人に言われる前に自分から何が出来るのかを考えられる人間になりたい ・人間力をつける ・個々の生徒の気持ちや考えを理解し受けとめられるようになること ・教員採用試験の勉強⑨ ・保健や体育以外の勉強もする事 ・漢字の間違いが多かったので漢字の勉強をすること ・何事も粘り強く辛抱してやり抜く精神力 ・様々な経験を積むこと② ・板書の漢字と安全管理の仕方③ ・安全への配慮③ ・道徳の授業の進め方 | | |

験、教材研究の重要性に気づいたことは、これからの彼らの研鑽において明確な方向を示すものになると考える。また、これから教育実習に臨もうと思っている2年生や3年生にも、早い時期から様々な勉強に本気で取り組んでおく必要性を伝えなければならない。

2.7. 大学での学びで実習に役立ったこと

「大学で学んだことの中で、今回の教育実習で役立ったことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。平成20年度の集計では、記述された内容を、①実技、②理論、③模擬授業、④その他に分類して回答を記載した。本研究では、平成20年度に得られた回答をもとにして設定した11項目を枠組みとして、記述された内容からキーワードを読み取り、11項目に対応させて集計し

た。結果として、複数回答になっている。項目12はその他として、具体的内容を示した。

本学は教員養成を主目的とした大学ではないので、教職に関する科目以外では、意図して教育実習に必要な内容は授業で教えられていない。そのため、授業で学んだ内容を肯定的に捉えている反面、学校現場での授業の現実との間のギャップも強く感じているようである。しかし、平成22年度から改善した教育実習事前指導の内容や方法はかなりの効果があったようで、64.1%もの学生が指導案の作成と模擬授業を経験は役立ったと答えている。さらに、13.8%の学生がこの模擬授業で配布された指導案が役に立ったと答えている。また、その他の回答でも、実習の事前指導で学んだ内容が役立った（15名）と答えている。ここで示された内容は、大学における

表5. 大学で学んだことの中で、今回の教育実習で役立ったこと

| | 人 | 割合 |
|---|----|-------|
| 1 陸上競技の授業で学んだハードル走の指導法 | 1 | 0.7% |
| 2 できない生徒の指導法や安全面の配慮 | 7 | 4.8% |
| 3 多くの運動やスポーツを経験できたこと | 12 | 8.3% |
| 4 指導案の書き方と模擬授業の経験 | 93 | 64.1% |
| 5 いくつかの授業でみんなの前に立った経験 | 3 | 2.1% |
| 6 学校スポーツ理論と実践で模擬授業の実践ができたこと | 4 | 2.8% |
| 7 模擬授業の資料は役に立った | 20 | 13.8% |
| 8 本当に現場と大学のギャップを感じた。 | 1 | 0.7% |
| 9 あまりない。なかった。 | 12 | 8.3% |
| 10 他大学と比べて、あまりにも教育実習の事前指導が不足している | 0 | 0.0% |
| 11 BSCで経験した計画する、伝える、声かけなどが役に立った | 3 | 2.1% |
| 12 その他 | 54 | 37.2% |
| (その他に記述された内容) | | |
| ①実技 | | |
| ・野外コースの授業で学んだ話し方、伝え方、動かし方、声の大きさなど④ ・体ほぐしの授業 | | |
| ・フレッシュマンキャンプで経験したレクリエーション ・テニスの授業で学んだこと② | | |
| ②理論 | | |
| ・1年で学んだ心理学や栄養学の知識 ・運動学で学んだアナログの知識④ ・教材研究の授業 | | |
| ・カウンセリングの授業で学んだ事 ・学校スポーツの理論と実際に学んだこと | | |
| ・事前に受けた柔道の授業 ・学校スポーツコースで学んだこと全て⑤ ・小中学校の授業参観 | | |
| ・保健体育科教育法Iで学んだこと③ ・トレーニング法やレクリエーション | | |
| ③事前指導 | | |
| ・事前指導で学んだこと⑤ | | |
| ④その他 | | |
| ・実習を経験した先輩の話 ・挨拶③ ・ゼミ合宿での模擬授業の経験 ・フットワークの軽さ | | |
| ・部活動で学んだトレーニング方法 ・部活で身に付けた専門知識③ ・教職の先生方のアドバイス | | |
| ・教師の立ち位置や見学者への対応を学んでいたこと | | |

今後の授業内容や方法の検討およびより効果的な教育実習事前指導を計画・運営するにあたって重要な示唆を与えてくれていると考える。

2.8. 大学の授業で事前に学んでおきたいこと

「大学の授業において、教育実習以前に学んでおきたかったことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。平成20年度の集計では、記述された内容を、①実技、②理論、③模擬授業、④その他に分類して回答を記載した。本研究では、平成20年度に得られた回答をもとにして設定した10

項目に対して、記述された内容からキーワードを読み取り、10項目に対応させて集計した。結果として、複数回答になっている。項目11はその他として、具体的内容を示した。

前節での回答と同様に、ここでの内容も今後の授業に関する検討において重要な資料になると考えている。特に、教職に関する科目である保健体育科教育法や模擬授業（学校スポーツの理論と実際、学校スポーツ専門実習Ⅰ・Ⅱ）においては、授業内容に加えなければならないことが多く示されている。また、教育実習事前指導においては、平成24年度から模擬授業に柔道を加えて7領域としたが、

表6. 大学の授業において、教育実習以前に学んでおきたかったこと

| | 人 | 割合 |
|--|----|-------|
| 1 専門種目以外のたくさんのスポーツの指導法、指導上の留意点、ルール | 23 | 15.9% |
| 2 運動嫌いややる気のない生徒を指導する際の指導法。指導法の面ではあまり大学で学べなかった。 | 11 | 7.6% |
| 3 授業構成の方法 | 14 | 9.7% |
| 4 指導案の書き方 | 23 | 15.9% |
| 5 板書の仕方 | 9 | 6.2% |
| 6 保健や体育の勉強会 | 4 | 2.8% |
| 7 教科を教えるではなく、教科で教えるということを実習前に学んでおきたかった。 | 1 | 0.7% |
| 8 事前の教材研究 | 6 | 4.1% |
| 9 もっとたくさんの模擬授業 | 52 | 35.9% |
| 10 どのような話し方をすれば人に聞いてもらえるのか | 2 | 1.4% |
| 11 その他 | 74 | 51.0% |

(その他に記述された内容)

①実技

- ・集団行動とラジオ体操の指導法③
- ・もっと沢山の専門的知識を学んでおきたかった
- ・実技の授業をもっと履修しておきたかった
- ・笛の使い方

②理論

- ・保健の専門的な内容と教材研究のやり方⑤
- ・保健の授業の進め方⑦
- ・授業展開の仕方
- ・問題行動を取る生徒の指導の仕方③
- ・授業を観察するポイントと記録の仕方
- ・現場の雰囲気を知るための学校での授業参観
- ・学んだ理論を実践で試す機会③
- ・実際の教員の方の話を聞いておきたかった。
- ・現場を知ることと学活やクラス運営について
- ・人前に立って指導する機会
- ・運動学をもっと深く学びたかった
- ・道徳の授業について④
- ・授業準備や授業運営に関する指導
- ・学校スポーツの理論と実際を教職必修に
- ・もっと宿題を出して、教材研究や教材観についての集団研究やディベートなどをやる必要がある。

③模擬授業

- ・保健の模擬授業⑧
- ・50分間の模擬授業④

④その他

- ・特にならない⑨
- ・実際の教育実習の現場で学ぶことが大事
- ・多くの授業を見学すること
- ・2回の教育実習と実習後の教職の授業
- ・現場での教育の実際の様子を参観する⑩
- ・授業で得たきっかけをボランティア活動や指導支援などの教育現場に自ら踏み込んで活用する経験②
- ・授業以外の場面での生徒との接し方
- ・自ら学ぶことが大切だと実習を通して感じた。
- ・声掛けの仕方と授業運営に関すること
- ・多く学んだが学び方が良くなかった

学生が授業担当できる時間は一人20分間の1回のみであり、1つの授業全体を運営できないことも改善課題であろう。さらに、模擬授業を体験できる授業を履修していない学生は、事前指導での1回の模擬授業体験だけで教育実習に臨むことになる。35.9%もの学生が「もっと多くの模擬授業」を教育実習前に体験しておきたいと思うのも当然だと考えている。改善策を検討しなければならない。

2.9. 後輩へのアドバイス

「教育実習全体を通しての感想、および後輩の3年生に伝えておきたいこと」という質問に対する回答を要約して示すことにする。似たような内容は省略して記載した。

①平成20年度（抜粋）

- ・睡眠時間は全然ないけれど、毎日がひどく充実していた。授業、部活動、教材研究のサイクルでとても辛かったけれど、教えれば教えるほど、吸収していく生徒を見ると毎日手を抜けない状態でした。3年生に言いたいことは、あまり指導案ばかりに気をとられすぎないようにして欲しいと思う。
- ・教育実習は楽しいことばかりではありません。厳しいことを言われたり、悩むことも多いと思います。先生という立場の責任の重さと難しさを知ることになると思う。でも、そんな苦労は、生徒たちの笑顔や感謝された一言、最後の色紙など、自分が頑張った分の反応を返してくれると嬉しくて吹き飛びます。やりがいを感じる瞬間だと思います。生徒は思っている以上に先生のことをよく見ています。いい加減な態度だと生徒はついてきません。せっかくの実習なので、全力を出して取り組んでほしい。
- ・大学で学ぶ教育実習と現場で経験する教育実習は、全く違い動揺しました。その違いを感じ取ることも教育実習の一環かもしれませんが、しかし、教育実習では泣き言は通じず、時間通りに授業やHRがやってきて、生徒に何を伝えたいのか自分なりに勉強しておかなければなりません。大学の授業は、現場とは異なりますが、準備段階としての勉強としては、とても良い訓練だと思うのでしっかりと勉強しておくことをお勧めします。また、私が感じた大切なことは、授業で手本として生徒に実演を見せることです。私たちは実際の先生に比べて若く、運動能力も高いので、実際に生徒とプレーしたり、手本を見せることができます。逆に言えば、教育実習生にできて先生にできない唯一の能力です。生徒にアンケートを取って分かったことですが、実演で失敗しても生徒に体育大学の先生でも失敗することがある、と感じさせることができ、生徒に失敗する勇気を与えることができます。先生たちの評価も、生徒が先生と楽しく運動していて良かった、と賞賛の声も多かったのです。実際に授業をする時、声だけで指示するだけではなく、生徒に手本を見せ、体やボールの使い方、失敗の仕方を見せることも重要ではないかと、教育実習に行ってみて感じました。
- ・何回も指導案を書き直し、授業もうまく進まなくてしんどかったけれど、その中でも楽しいことがいっぱいあった。生徒が「先生！」と呼んでくれて、いっぱい話したり、授業が「楽しかった」と言ってもらえた時はすごく嬉しかった。しんどいと思うときがあるけど、その中でも得るものはたくさんあると思うので、後輩の皆には頑張ってもらいたいと思います。
- ・夢のような3週間でした。大変なこともたくさんありましたが、本当に充実していました。子どもはとても素直で、私の行動しただいで伝わるものがたくさんあるんだなと感じました。生徒に言っていることは、自分にも言っているような気がしました。「教育は共育」ということをとても実感しました。3年生へ。実習では自分の良いところも、そうでないところも現れます。そして、それは子どもには全部伝わります。

- 自分らしさを忘れずに、素直になることが大切ではないかと思います。その誠意は必ず子どもに伝わり、子どもも自分も成長できると思います。
- ・教育実習に行くにあたって、中途半端な気持ちでは絶対に行かないで欲しい。生徒たちや先生たちの貴重な時間を削ってまで実習させていただいているので、ただ免許が欲しいからなどの気持ちで行かれると、すごく実習校に迷惑がかかるということを十分理解した上で、実習に臨んで欲しい。
 - ・理想と現実の違いを恐ろしく感じた3週間でした。ある程度できない生徒のことを頭に置いて指導案の作成や授業に取り組んでもらいたい。出来ない生徒よりも、出来るけれどやらない生徒を指導する事が一番難しい。
 - ・大学で勉強することと現場でやることはかなりギャップが大きいこと。大勢の生徒に話を聞かせるためにはどのようなタイミングでどういう話し方をすればいいのか、教育実習に行く前に体験することが出来るなら、面倒でも経験しておくといいと思う。
 - ・実習はとても楽しく充実した時間でした。実習生という立場なので教員の全ての仕事に接することは出来ませんでした。体育科以外の先生方や、授業を担当していない生徒とも関わることができ、様々な立場の先生方の考え方や、学年によって違いの大きい生徒たちの考え方などを感じ取ることが出来た。
 - ・3週間は充実した時間だった。疲労は確かにあったが、それ以上に学べたことが多い。寝ずにやらなければならないという気持ちが強かった。教育実習だけれども、生徒からすれば先生であり、教育者ということのを忘れずに実習に行きたくて欲しいと思う。
 - ・生徒たちの目はキラキラ生き生きしている。実習中はすごく元気をもらおうし、助けられた部分が多い。教育実習はインターシップ実習で学んだ事とはまた違うことを学べた。本当にいい経験ができたことに感謝しています。若さ、元気さ、へこたれずに。
 - ・ある先生がおっしゃっていたことで、私が印象に残っているのは、授業のネタは10持っておかなくては行けないが、授業では1教えるつもりで授業すること。教材研究はしっかり行うことが大切。教育実習は大変だが、とても良い経験をさせてもらいました。
- ②平成23年度
- ・教育実習を終えて、始まる前と終わった後では、かなり心境の変化を感じるようになった。はじめは先生や生徒と壁を作っていたため不安だった。慣れてくるとコミュニケーションも上手く取れるようになったが、油断はしないように気をつけた。初めての授業は全てが空回りし、授業というにはほど遠いものだったが、回数を重ねる毎に授業らしくなった。今回の実習を通して、教師という仕事はすごく大変だが、生徒のために全力を尽くすやりがいのある仕事だということがよくわかった。
 - ・しっかりと担当する单元について知識を深めておくことが必要で、生徒がわかりやすい表現や動作の前段階の動作からしっかり順序を考えて行うこと。実際の現場で知ることとはたくさんあり、教師として働くことの難しさ、教師というプロとしての義務があるため本当にやりがいを感じる分、難しい仕事であるなど感じた。
 - ・教育実習を通してやはり教師になるということは大変なことであり、今の自分にはまだまだ努力が必要だと感じた。また、知識も乏しいので実際に現場に立って生徒と向き合って授業する時に恥ずかしくないように知識を付けていきたい。実習を行う前に、実習校の先生とよくコミュニケーションを取っておくと実習に早くなじめると思う。
 - ・教育実習はものすごく辛い3週間でした。

体力的にも精神的にもとてもきつかった。自分の教えることに対しての実力の無さや、求められることの高さはものすごいことであった。しかし、そのおかげで成長できたと思うし、自分自身の至らないところの発見や成長につながったと思う。

- ・最初からいい授業なんてできないので、まずはへたくそでも自分が出来ることを一生懸命やって、こちらの誠意を見せたら生徒もついてきてくれるとという事を感じたので、自分が出せる100%の力を毎時間出すことが大切だと実習を通じて学んだ。
- ・模擬授業とは違い予期せぬ事が起こったりして思い通りに授業は進まないのが現場だ。日頃から自分の意見を言ったり人の話に耳を傾ける経験を積んでおくと、授業でもホームルームの場面でも役立つと思う。ハキハキと喋ることを心がけ、教育実習生として清々しく実習に臨んで失敗を恐れずに行動することが一番大切だと感じた。
- ・事前の教材研究の大切さと、自分から生徒たちに話しかけることの必要性を学んだ。教育実習は自分の悪いところを先生方が直してくれるいい機会だと思うので、たくさん失敗してもいい。教師は経験を積まないといけない仕事だと思うので、失敗を恐れずにがんばってほしい。
- ・教育現場では特に問題のある生徒ほど教育の力が必要だと痛感した。教育は本当に難しいけれどとても重要でやりがいがあり、感動も想像以上に大きい事を実習を通して経験した。もっと沢山子どもの笑顔が見たいからこそ絶対教師になりたいと改めて感じた。後輩には、大学での知識や経験の多くは試験や現場で何らかの形で役に立つ事が多いので、本気で教師を目指す人ほど、自分のためじゃなく自分が出会う子ども達の未来のために一生懸命取り組んでほしいと思う。
- ・人間性がすごく要求される。上下関係や目上の人への対応が不十分で、注意を受け

た。自然体で自分のカラーを出していく事の大切さを痛感した。生徒に学んで欲しいという強い意志を持つ事が大切。

- ・授業以外の教師の仕事や学級運営など、現場に行かないとわからないことがたくさんあった。教育実習でどれだけ沢山経験し、自分の力にするのかは自分次第。積極的に学ぼうとする姿勢で臨んで欲しい。
- ・実際の現場に立たせて貰えることに感謝し、貴重な教育実習という時間を有意義に過ごして欲しい。生徒とのコミュニケーションを積極的に取ること。教材研究など事前の準備を怠ると生徒にも自分にも勉強にならないので、多めに自分の引き出しを準備しておいた方がよい。
- ・教材研究には終わりが無いので、実習に行く前の段階から地道にしておくことが大切。保健体育以外のことも知識量を増やしておく必要がある。ポキャブラリーを増やしておくことも授業を行う上で必要。
- ・集団行動の指導法を学んでおく必要がある。実際の授業は模擬授業のようにスムーズには進まないで、自分自身で勉強して実習に臨む必要がある。
- ・多くの生徒や教師と触れ合い、教育現場での現状を肌で感じる事ができた。教育現場というのは生徒を教育し、人間性を育てる場であると思っていたが、教師も又自身を見つめ直し、人間性の向上ができる場であると感じた。この実習を通して、教師になりたいという思いが一層強くなった。多くの生徒が苦手意識を持っている競技については深い教材研究が必要であり、どうすれば生徒が興味関心を持てるのかを考えていくことが大切だと感じた。
- ・とても素直で明るく積極的な生徒ばかりで勉強不足の自分が助けられ楽しく授業ができた。先生からいただいたアドバイスを積極的に吸収しようという姿勢が大事だとわかった。この言葉を今後社会に出た時も忘れずに実践したい。自分の人生の中でとて

もいい経験をさせてもらった3週間だった。

- ・教育実習は毎日が辛くて逃げ出したくなることもあるかもしれないが、終わった頃には必ず成長することができる。実習先の指導教官は厳しいかもしれないが、必ずサポートしてくれるし心強い味方になってくれる。感謝の心と強い意志を持って実習に取り組んで欲しい。失敗を恐れず、失敗から多くを学んで欲しい。
- ・教育実習は教員を志す者のみが行うべきものだと感じた。指導教諭をはじめ数多くの先生方は、教員になって欲しいという思いで、全力で指導・支援してくださっている。それに全力で応えるには教員という志は欠かせないと感じた。矛盾するが、教員志望以外の学生にも経験して欲しいとも感じた。それほど実習の経験により今後に活かすことができるものを沢山得ることが出来るからである。後輩達は、大学で学んだことがそのまま現場で通用するとは思わないで欲しい。教員を目指すならば、できるだけ学外へ飛び出して、ボランティアやスクールサポーター等地域に出向いて欲しいと思う。教育実習を経験することで、また教員としての魅力を感じることができると思う。
- ・教育実習はとても楽しかったが、自分自身の無力さも感じた。失敗するのは当たり前だが、やはりショックだった。教員としての十分な対応や行動ができておらず、ありきたりの実習生で終わってしまった。教員を目指す者としてもっと事前の勉強が必要だと思った。
- ・生徒への説明の難しさと工夫の大切さを学んだ。できない生徒への運動感覚の伝え方を練習したり、人前で積極的に話をする練習も実習では役に立つ。教える立場としての自覚と責任を持って教材研究をしっかりとする必要があるが、それでも失敗することが多い。一生懸命に生徒と接し、授業を行えば生徒に伝わるので、どんなことがあ

ても前向きに取り組むことが大事だ。

- ・実習生として現場に入り、あらためて教師という仕事の大変さを実感したが、それ以上にやりがいを感じて、一層教師になりたいという気持ちが強くなった。生徒とのコミュニケーションの大切さを実感した。なによりも、事前に沢山の指導案を書いたり模擬授業を経験しておく必要があると思う。
- ・実習前から担当教員と連絡を取り、しっかり打ち合わせを行い、万全の準備をして実習に臨めば、実習中に指導案の作成に追われることはないと思う。指導案に追われて終わる教育実習は失敗であると思う。
- ・教育実習では本当に沢山のことが体験でき、学ぶことができます。指導案に悩まされたり、自分の知識の少なさに戸惑ったりしますが、最終的に楽しかったと感じることは、積極的に学ぼうとする姿勢があれば必ずできます。教育実習でしか学べないことをしっかりと学んでください。
- ・先生に教師という仕事は愛情と我慢だと言われた。たった3週間だったけれど教師という仕事の大変さとやりがいを感じた。授業をするにあたっては、やはり準備が大変で、後輩達には教材研究や授業の工夫を十分にしておいて欲しい。
- ・指導教員との関係の重要性。今まで学んできたことと違うことが多々ある中で臨機応変に対応しなければならない。指導教員とコミュニケーションを沢山取って、自分の意見を上手に伝える環境作りが大切だと思う。
- ・自分が未熟なために先生方にも沢山の迷惑をかけてしまった。それでも丁寧に指導してもらったり、落ち込んだ時には優しく声をかけてもらった。また、いろいろとお話を聞かせていただき、生徒に対する先生方の愛情をとっても感じた。未熟な自分が申し訳ないと思うし、これからは私も同じように周りの人に愛情を持って接していきたいと思う。実習を終えた後の充実感や達成感

は、壁にぶち当たった数だけ大きくなると思う。ぜひ積極的に取り組み沢山の失敗をして欲しい。

- ・3週間はとても短いので、何か志を持って取り組むことが大切だと改めて感じた。自ら考え行動する教師がやるからこそ生徒達にも伝わると思うので、すぐに答えを求めずにまずは自分で考えて取り組む必要がある。良い実習にできるかどうかは自分次第だと思う。
- ・事前の打ち合わせを早くやっておくことと、模擬授業をやっていれば何とかかなと言う軽い気持ちでは授業はできないことを実感した。生徒にわかりやすく伝えることの難しさを実感した実習だった。
- ・生徒にとっては教師、先生方にとっては教育実習生という立場で、どう振る舞うべきか戸惑うこともあったが、自分が今できること、すべきことは何かを考え、若さと元氣と笑顔だけでは負けないように心掛けて3週間で過ごした。
- ・授業を行うことで指導することの難しさを感じたが、自信もついた。指導すること、計画通りに授業を展開していくことの大変さを知ることができ、今後の人生の糧としていけると実感した。早めに生徒の状態や指導の範囲を聞いて十分に準備をしていくことが大切。
- ・本当に教師になりたいと思う人以外は教育実習に行かない方がよい。ゲート科目などの教職授業を受けられる条件や実習に行く条件をもっと厳しくする必要がある。
- ・実際に行ってみなければわからないことだらけだった。クラスによって色があり、クラスに応じて授業展開の仕方を工夫しなければならぬことが一番苦勞した。大学で学んだことは基本的な知識だけで、生徒との距離や先生方とのコミュニケーション能力も問われると感じた。
- ・教育実習を通して教師としての役割、責任、使命について深く考えさせられた。教

師の家系で育って少しは教師というものがわかっていたつもりだったが、現場は自分の想像より過酷で、密度の濃い毎日が待っていた。生徒にわかりやすく伝えるために苦勞するのは教師として当たり前で、日々授業のため、生徒のため努力して当たり前で努力していない人なんていないことを強く感じさせられた4週間だった。今回の実習で、「私はまだまだ勉強不足で知らないことが多すぎる。もっと勉強したい。もっと知りたい。」とより強く思うようになった。自分を過信することなく、決して現状に満足せず、探求心と情熱を持って日々努力することが大切だと気付いた。

- ・生徒に対する接し方や広いグラウンドでの指導法など現場でしか感じることはできない様々なことを学ぶことができた。様々な分野の知識を浅くても広く持って実習に臨む必要があると感じた。
- ・生徒との関わり方では、考えていなかった答えが返ってきたり、面白い反応が返ってきたりしてとても新鮮で勉強になった。指導案通りに授業を行うことが難しく、生徒の答えをいかに広げて考えさせるかということ学んだ。事前の打ち合わせでどこを担当するのかを聞き、実習までに指導案を完成させておくで生徒への関わりや授業参観に積極的に行け、勉強できると思った。
- ・大学での授業は役に立つことばかりなので学校生活をしっかりと送ることが大切。早いうちからボランティアなどに積極的に参加することも重要。
- ・教育実習ではどの単元を教えるかは関係なくあらゆる単元の指導案を書いた方がよいと思った。指導案を書く準備と練習、できるだ多くの模擬授業の経験も実習前にやっておく必要がある。
- ・同じ体育の先生でも、考え方は人それぞれで全然違って、授業のやり方や生徒に求めているもの、授業の中で伝えようとしているものが違うということを知ることができ

- た。体育の授業より保健の授業の方がそれぞれ個性があり、真面目な授業から面白い授業までの組み立てを見ることができた。
- ・話し方から立ち方から生徒の動かし方など全てに細かい指導があった。朝6時に出勤し22時に退勤、家では指導案づくりの毎日寝る暇もなかった。週に17時間の授業を初日から担当し、全ての指導案を作成するため時間に追われた。教材研究が浅いと指導が入る。板書計画、黒板の使い方にも細かい指導を受ける。体育実技では、話の聞かせ方、動かし方、班の分け方、移動、ローテーションのやり方、全て指導しないと生徒は動かない。授業の技術は3週間で厳しく鍛えられた。
 - ・実習に行ったら、空き時間は他の先生方の授業を見に行き、授業の進め方や生徒との関わり方を見ると良い。生徒とコミュニケーションを取るためには休み時間にはできるだけ教室に行く必要がある。
 - ・実習の経験で、今までに受けていた授業の工夫に気づき、教師という仕事の大変さを知ることができた。実習で多くの失敗を経験し、自分の成長を実感することができた。
 - ・自分の知識の無さを実感でき、これからの課題も明らかになった。失敗するのは当たり前なので全力で取り組みればよい結果が得られると感じることができた。厳しい担当の先生の方が成長できると感じた。何よりも大切なのは、挨拶と礼儀、迅速な行動を徹底して行うことだと思った。
 - ・実習を通して現場の先生方のプロフェSSIONALな部分に触れ、教師という職業に就きたいという気持ちが強くなった。実習中に自分は本当に力不足で情けなく、悔しい思いを何度もしたが、その思いをこれからも持ち続け、常に向上していけるようにしたいと思う。準備は本気でやる必要がある。
 - ・初日でもうやめたいと思ったが、今では自らも成長することができ充実した3週間だったと思える。辛いことも多くて大変だが、その中で様々な工夫をし挑戦し続けることで、短い期間だが成長につなげることができるので頑張りたい。
 - ・実際の現場で生徒と関わることで、生徒に理解させることの難しさを感じた。自信がなくても生徒の前では堂々とはっきり話すことが大切。実際の授業の前に模擬授業をやるべきである。先生や生徒とのコミュニケーションがすごく重要だと感じた。
 - ・悩み、考え、行動し、改善を目指して努力する3週間は本当に大変だったが充実した時間だった。生徒や先生達とのコミュニケーションが大切。
 - ・多くの先生方の授業を見せて頂き、授業の進め方や生徒との接し方にも様々な方法があるのだと気づき、学ばせていただくことができた。大学では学ぶことのできない学校の現状にも全身で触れ自分自身の無力さを感じ、これまでの考え方の甘さを痛感した。多くのことを経験し、学び、知り、悩み、ぶつかり、全力で取り組むことのできた実習となった。
 - ・人に教えることの難しさを改めて感じた。生徒と接する時の言葉遣いなど教師として常に責任感のある行動をしなければならないことを実感した。
 - ・学校では実習生でも先生として見られるため一つ一つの授業も真剣勝負で挑んだ。沢山失敗したが、一生懸命さは生徒に伝わったと思う。
- ここで書かれている回答には、実際の教育実習を苦勞して経験した者にしか書けない学びと省察が示されており、これから教育実習を経験しようとしている後輩にとって大変参考になる内容である。平成20年度の学生も23年度の学生も、本気で教育実習に取り組んできた者が体験によって学んだことは、さほど変わらないことがわかる。長年大勢の教育実習生を指導してきた経験を持つ筆者にとっても、学生達がこれほどの深い学びを経験して

いるとは思っていなかった。今後の教職の授業において学生達に伝えていかなければならないことだと感じている。これらの先輩達の教育実習における具体的な学びの数々を、来年度以降の2・3年生の教職の授業や教育実習事前指導において、教員免許状を取得するために教育実習に臨もうと考えている学生たちに対して是非とも紹介したいと考えている。

2.10. 教育実習評価票で示された課題

ここでは、平成23年度の教育実習評価票に書いていただいたコメントから、実習参加者の約4分の1にあたる学生に対して示された問題点であると思われる内容の要点を示す。

- ・教材研究や指導案、事前準備は良かったが、説明時の言葉遣いや理解度の確認の部分に改善が必要である。体育では生徒同士の距離等で安全面に配慮する必要があった。大きな声で指示したが、言い間違いや全体に伝えることに工夫が必要である。
- ・当初実習に対する考え方や取り組みが甘く、指導案の不備や準備不足があった。
- ・実習を通して自信を持って生徒の前で話せたが、最初は集団行動の号令が分からず生徒から教えられた。貴学では教員を目指す学生が部活動をやめ、勉強に集中することは、教員になってからを思うと両立するべきだと考える。
- ・指導案作りに苦勞し書き直し・練り直しばかりで、1時間の授業の難しさを強く感じた。
- ・毎回指導案の仕上がりが遅く、多くの先生方に迷惑をかけた。教師として生徒を引っ張るパワーがあまり感じられなかったので、残りの学生生活で備えて欲しい。
- ・保健で生徒参加型にするにはもっと教材研究が必要と感じたと思う。指導時の服装・言葉遣いに気をつけること。
- ・体育では苦手な生徒に手立てを与え指導したが、全体に目が届かなかった。安全面や運動量の確保から改善が必要。保健は内容をしっかりと伝えたが、説明の仕方に戸惑った。
- ・保健は教材研究を十分に準備したつもりでも、本番では不十分であったことに気づいた。
- ・教材研究を実態に合った場の工夫、補助・試技の研究をした。初めに作成した指導案は「予想される生徒の反応」が記載されず、展開したい授業と離れた部分が多い。
- ・教科指導で、教材研究は頑張れたが自身の理解不足で表現があいまいであり、生徒が戸惑った。保健・体育共に授業の流れを整理すると内容の伝わる生徒主体の授業になる。
- ・体育のハードルはレーンの書き方やハードルの配置など、安全面の配慮が出来なかった。全種目で個別の指導が少なかった。保健では板書が多く、説明もあいまいだった。
- ・指導案作りに苦勞していた。大学で「指導案とはこんなものだ」という指導が必要。
- ・保健・体育とも教材研究が不十分な面が見られた。教科書の内容・競技の特性・段階的指導法等を事前に研究・把握する必要あり。
- ・教育実習に対し甘い考えが少しでも無かったかどうか。事前に見学や説明をしていながら知識の量が少ない。教師としての専門的知識を頭に入れること。教材研究の創意工夫、指導案に関しては努力が必要。
- ・授業中の言葉遣いが大変雑な言葉であった。授業をするという意識を持って欲しい。
- ・授業では教材研究が不足していた。授業後に指導したことを自分で考えもせずに行う状態が続いた。残念なことは放課後の部活動を指導しなかった。
- ・授業前にする準備をしなかったり保健の授業に遅れたりした。
- ・当初指導案どおりに授業を進めようとし、予定時間を余した。指導案の立て方を工夫し、シミュレーションしたほうが良い。教職課程の指導論等で、生徒観・教材観・指

導観を学生が理解し実習に望めるように指導して欲しい。

- ・教科指導は、準備不足・知識不足で思うような授業が出来なかった。
- ・教科指導では知識の無さや指導技術の未熟さを教材研究や他教員の授業観察で努力した。
- ・体育の専門知識を学ぶことがもっと必要。教科書レベルが理解できていない。
- ・各種目の基礎知識の勉強不足を感じた。楽しく授業に取り組ませたいことが伝わるが、基礎があつての楽しさを追求して欲しい。
- ・基礎的な学力や誤字脱字文章の誤りを直す努力をすること。
- ・集団行動の規律の確保や安全に対するの注意を感じとった。保健は板書の工夫や基礎的知識が課題である。
- ・勉強不足で正確な説明が出来なかった。保健の板書で漢字の書き順を多く間違えた。
- ・教職に対する考え方が甘く、指導の意味（出来ない生徒を出来るように努力させる）を1番の目標に指導した。今までの授業の躰で自主的に参加できているのを反対に依存する言葉があり、指導力の弱さを感じた。
- ・実技は計画は良いが、安全管理や指示に甘さがあり課題である。
- ・保健は知識伝達型で、知識不足と言葉足らずで理解を得られなかった。
- ・実際の指導で指示だけで終わり、巡回で生徒の動き等で授業の雰囲気をつまめばよかった。指導案はパソコンが使えず、書き直して時間のロスは本人とそれを待つ指導教官にも痛手であった。社会で必須のパソコン技術は身につけること。
- ・母校実習で甘えがあつた。指導案作成で計画性を持つ工夫が足りず、また作成が苦手なため生徒と接することが出来なかった。
- ・保健体育の実習生としてはコミュニケーション不足が目立った。体育教師等先生方に

対する挨拶や積極的に質問する姿勢に欠けていた。生徒とのコミュニケーションも不足し、授業で苦勞する場面があつた。

- ・自分の得意な種目は楽しい授業が展開できたが、不得意な種目は教材研究も不十分で質問にも答えられなかった。保健は何を伝えるかの点で勉強不足で、工夫する必要があるが見られた。誤字・筆順も気をつける。
- ・体育・保健では基礎知識の低さから技能を正しく示範や説明が出来ず、自信を持ち個別指導ができなかった。保健も用語説明に終わった。生徒と積極的に関わる姿勢がありながら基礎知識の低さ、教材研究不足から自信のない姿が残念であつた。
- ・保健での板書のスピードと字の丁寧さ不足は生徒からの指摘でも改善できず、大学での練習を。
- ・教材研究（知識）と認識のレベルの低さが目立った。
- ・知識・理解・授業方法・指導案の作成については、これから多くの研修を重ね、より良いものを作り上げることが必要。大学で学んだ内容を実践に役立てる訓練が必要。
- ・実習当初から指導案作成に追われ、授業当日に提出し、教材研究不足で授業を行った。体育では説明や方法が上手く伝わらず個別指導が出来なかった。保健も理解不足で自分の言葉で伝えられなかった。
- ・生徒への指示での号令や説明の仕方に生徒が戸惑う場面があつた。今後、集団指導、集団指示を学ぶ必要有。技術を教える際、安全確認をし、事故が起こらないようにする。授業をスムーズに進める以前に授業の計画や指示が出来るように考えること。
- ・保健では勉強不足であつたが、まとまった授業が出来た。板書や発問には工夫と努力が必要。体育では指示を出す時の声量と立ち位置に課題があつた。
- ・集団行動のポイントを押さえてから実習に。
- ・ラジオ体操が満足に指導できない。
- ・教材研究や指導案の書き方を指導して欲しい。

い。

- ・2週間の実習は短い(高校)。

ここでご指摘いただいた事柄の多くは、学生個人の努力によって改善できることではあるが、大学の授業での指導において早い段階から意識させ取り組ませることによってある程度改善できることでもあると考える。特に、指導案の書き方や教材研究の仕方、授業構成の仕方、板書の仕方などについては、教科教育法や事前指導において学ばせることができる内容であると考えている。また、集団行動に関する指導法やラジオ体操については、教科に関する科目(実技科目)の中でも扱うことが可能な内容であり、今後の改善の仕方を検討しなければならない。

2.11. 学びの実態から読み取れる課題

以上のような、学生の回答から、教育実習を経験することで、日常の大学の授業では経験することのできない多くのことを感じ、考え、学ぶことができ、彼らが大きく変容したことを読み取ることができる。いつの時代でもあまり変わらない教育現場での生徒との触れ合いや授業準備や授業運営の経験によってしか体験できない学びを通して、本学の学生達も大きく成長していることが確認でき、実習校での先生方の指導には感謝している。

しかし、これらの回答から、大学の教員養成に関わる授業や教科に関する科目の指導上の問題点と今後の課題も読み取ることができる。以下に、大学での授業に関して、改善が必要となりそうな回答が得られた3項目における課題を示す。

①実習で何を学ぼうと思っていたか

回答の内容として、具体的な授業に関することより、教師という仕事や生徒との関わりに関する事柄を学ぼうと考えていた学生が多かった。本論には記載していないが、安易な姿勢や考え方で実習に臨む学生もいたことから、教職の科目や保健体育科教育法の授業、

教育実習事前指導の場で、教育実習の意義と課題や臨む姿勢についてきちんと伝えるよう、指導内容を再検討しなければならないと考える。

②大学で学んだことの中で、今回の実習で役立つことは

回答の中で否定的な内容として、「あまりない、特になかった、現場と大学のギャップを感じた」と書かれていた。この回答は、教員養成大学の附属校である前任校でも教育実習に来た学生たちへの調査結果に問題点として毎年示された。教員養成大学でさえ、毎年1000人を超える教育実習生を受け入れて指導している各附属学校からの強い意見がなければ放置されていた課題であり、大学と附属の共同研究の結果として、必修科目を含むカリキュラム改善がやっと行われた経緯がある(松田ほか, 2007)。本学は教員養成系大学ではないが、6割を越える学生が教員免許を取得することを考慮したカリキュラムの検討や授業内容の再考が必要であると感じている。指導案の作成と模擬授業の経験に関しては、平成22年度から教育実習事前指導の実施形態と方法を改善したため、平成23年度の実習のレポートではその成果が示されたと思っている。今後もさらなる成果が上がるよう、事前指導だけでなく、他の科目での内容や方法の改善を検討していかなければならないと考えている。

③大学の授業において、教育実習以前に学んでおきたかったこと

教育実習の現場で苦勞した学生の要望として、「指導案の書き方、授業構成の方法、運動嫌いややる気の無い生徒の指導法、できない生徒への指導法、もっと多くの模擬授業」が示されている。毎年の保健体育科教育法の授業では、かなり徹底して授業構成法や指導案の書き方を指導演習してきたが、学生にとってはまだ不足しているのだろう。来年度の教育実習直前指導や3年時の事前指導でも、再度確認・指導しなければならない検討課題で

ある。実技の指導法に関しては、実技Ⅰの各種目の授業における指導内容や方法の検討が必要であると思われるが、②での検討と同時に、大学全体の問題として今後検討していかなければならない課題であろう。

3. 教育実習の自己評価における変容について

この章では、教育実習における指導と評価の一体化を目指した対応として、実習校で行われる実習評価の評価項目や評価観点と同様の視点で実習生本人が行う自己評価の実施につなげるために、試行的に実施している教育実習自己評価の結果について検討を行う。

3.1. 調査方法

教育実習直前指導に出席した学生全員に依頼した自己評価票（資料1）を、実習終了後に提出させ、評価結果と課題と成果の内容を項目ごとに集計した。回答は平成20年度は教育実習参加者144名中84名（回収率51.9%）、平成23年度は参加者176名中144名（回収率81.8%）であった。

自己評価票は、本学の実習評価用紙の評価観点・評価規準とは若干異なるが、教育実習においてどのような観点と規準で評価されるのが明確に示されたものを使用した。

自己評価票は、①教材研究、②指導計画の立案、③学習指導と評価、④生活指導と生徒理解、⑤勤務態度と実習への意欲、の5つの評価項目と、各項目ごとに4～5の評価観点で構成されている。

自己評価は、実習の中間時期と終了時の2回、優から劣までの5段階で行い、同時にそれまでの成果と課題を自由に記述することを求めた。なお、自己評価の中間時期については、実習校によって実際に授業担当する時期や状況が異なるため、学生の判断に任せた。

なお、本論では両年度とも自己評価票の成果と課題の欄に記述された内容を実習の中間時期と終了時とも全て集計したが、考察の対

象にはしなかったことを断っておく。

3.2. 結果と考察

(1) 自己評価の変容について

中間時と最終時の自己評価の各項目ごとの値（5から1点）を集計し、それぞれ平均値と標準偏差を求めた。Excelを使用して自己評価の値の伸びに関してt検定を行った（表7と8）。

表7と8の集計結果の検定から、評価項目Vの1.出勤の状況と2.指導案・日誌等提出物の提出状況と4.人権等への配慮と規範意識を除く、他の全ての項目・観点において、中間評価時よりも最終評価時の評価が高い値になったといえることができる。また、標準偏差からも最終時の方が評価の散らばりが減少したことが分かる。平成23年度の出勤状況に有意差がみられたことは問題であると言えるが、この理由については精査する必要があると考える。ほとんどの評価項目で中間評価と最終評価に有意差が認められたことから、教育実習における授業経験と指導教諭の適切な指導によって、学生本人が明確に自覚できる程度にまで各観点到示されている実践力が高まったと自己評価していることがわかる。しかし、項目や観点によっては、満足いく程度にまで実践力が高まったと評価されていないものがあり、実習校からの評価コメントでも指摘された教材研究や学習指導と評価の項目に含まれる多くの観点において評点4に満たないものが多い。特に、中間評価で2点台の数字が示されている観点については、教育実習以前に指導しておくべき項目であり、学生自身が事前に身に付ける努力や練習をしておかなければならないことであるともいえる。

以下に、評価項目ごとに課題となる観点についての考察結果を示す。

①中間評価での特徴から

I教材研究では、「2.学習指導要領および学校指導計画等の検討」において平成20年度で2.69、平成23年度で2.83、「4.単元設定理由の

表7. 平成20年度教育実習 自己評価結果 5段階評価での中間評価と最終評価

| 評価項目 | 主な観点 | 中間平均 | S D | 最終平均 | S D | t 検定 |
|---------------|-------------------------|------|------|------|------|------|
| I 教材研究 | 1.教科書等の分析・活用 | 3.08 | 0.90 | 3.96 | 0.84 | *** |
| | 2.学習指導要領および学校指導計画等の検討 | 2.69 | 0.95 | 3.39 | 0.94 | *** |
| | 3.興味・関心に応じた教材の開発・工夫 | 3.24 | 1.02 | 4.08 | 0.86 | *** |
| | 4.単元設定理由の明確化 | 2.95 | 0.90 | 3.87 | 0.86 | *** |
| | 5.教科内容に関する専門性 | 3.07 | 0.95 | 3.85 | 0.85 | *** |
| II 指導計画の立案 | 1.本時の目標と評価の明確化 | 3.23 | 0.98 | 4.01 | 0.84 | *** |
| | 2.目標に応じた学習指導過程の構想 | 3.11 | 0.82 | 3.83 | 0.78 | *** |
| | 3.発問・助言等と反応予想の明確化 | 2.83 | 0.94 | 3.83 | 0.90 | *** |
| | 4.資料・教具・機器等の準備, 板書計画の立案 | 3.11 | 0.93 | 3.98 | 0.83 | *** |
| III 学習指導と評価 | 1.音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ | 3.25 | 1.08 | 4.17 | 0.84 | *** |
| | 2.受容的, 応答的な姿勢 | 3.21 | 0.86 | 3.88 | 0.84 | *** |
| | 3.生徒の反応への適切な応答 | 3.04 | 0.94 | 3.83 | 0.83 | *** |
| | 4.資料・教具・機器等の活用, 効果的な板書 | 2.87 | 0.91 | 3.77 | 0.81 | *** |
| | 5.授業中および授業後の適切な評価活動 | 2.71 | 0.96 | 3.50 | 0.87 | *** |
| IV 生活指導と生徒理解 | 1.生活場面での生徒との関わり | 3.71 | 0.89 | 4.62 | 0.62 | *** |
| | 2.学級指導および教室環境への配慮 | 3.58 | 0.94 | 4.32 | 0.69 | *** |
| | 3.観察に基づく個と集団の課題把握 | 3.10 | 0.93 | 3.89 | 0.85 | *** |
| | 4.道徳・特別活動への参加 | 3.49 | 1.21 | 4.06 | 1.03 | *** |
| V 勤務態度と実習への意欲 | 1.出勤の状況(無断欠勤, 遅刻等) | 4.95 | 0.34 | 4.94 | 0.36 | n.s. |
| | 2.指導案・日誌等提出物の提出状況 | 4.30 | 0.99 | 4.46 | 0.88 | * |
| | 3.協同的な姿勢・コミュニケーション力 | 4.01 | 0.91 | 4.52 | 0.78 | *** |
| | 4.人権等への配慮と規範意識 | 3.98 | 0.91 | 4.32 | 0.73 | *** |

(n=84 ***は $p<0.001$, **は $p<0.01$, *は $p<0.05$ を示す)

明確化」において平成20年度で2.95, 平成23年度で3.08と2観点で低く評価している。

II 指導計画の立案では, 「3.発問・助言等と反応予想の明確化」において平成20年度が2.83, 平成23年度が2.87と低く評価している。

III 学習指導と評価では, 「4.資料・教具・機器等の活用, 効果的な板書」において, 平成20年度で2.87, 平成23年度で2.86, 「5.授業中および授業後の適切な評価活動」において平成20年度で2.71, 平成23年度で2.76と2観点で2点台と低く評価している。

学校教育の現場で授業を行うのに際して, 最低限身につけていなければならないこととして, 授業構成の力がある。前章の教育実習での学び調査の回答でも, 「現場の授業で何に気付いたのか」と「実習を通して何を身に付けたのか」, 「実習後の勉強の課題」に関す

る質問の回答に書かれていたように, 教材研究不足や授業構成における基本的な考え方の理解不足が課題としてあげられていた。また, 実習校からの評価コメントにも同様の指摘が多数示されていた。自己評価の調査においても, 同様に認識していることから, 実習に臨む前に, もっと徹底したこれらの内容に関する指導を行わなければならないことがわかる。教育実習でお世話になる学校で行われた事前のオリエンテーションや打ち合わせから本実習までの期間で, 最低限の教材研究は済ませておき, 単元計画と単元前半の指導案の素案を準備しておくように, 保健体育科教育法の授業や事前指導, 模擬授業に関わる授業において指導を徹底しなければならないと考える。

②最終評価での特徴から

表 8. 平成23年度教育実習 自己評価結果 5段階評価での中間評価と最終評価

| 評価項目 | 主な観点 | 中間平均 | S D | 最終平均 | S D | t 検定 |
|---------------|-------------------------|------|------|------|------|------|
| I 教材研究 | 1.教科書等の分析・活用 | 3.19 | 0.59 | 3.85 | 0.34 | *** |
| | 2.学習指導要領および学校指導計画等の検討 | 2.83 | 0.73 | 3.46 | 0.57 | *** |
| | 3.興味・関心に応じた教材の開発・工夫 | 3.13 | 0.71 | 3.90 | 0.57 | *** |
| | 4.単元設定理由の明確化 | 3.08 | 0.60 | 3.71 | 0.51 | *** |
| | 5.教科内容に関する専門性 | 3.02 | 0.49 | 3.71 | 0.47 | *** |
| II 指導計画の立案 | 1.本時の目標と評価の明確化 | 3.26 | 0.57 | 3.94 | 0.46 | *** |
| | 2.目標に応じた学習指導過程の構想 | 3.10 | 0.48 | 3.73 | 0.45 | *** |
| | 3.発問・助言等と反応予想の明確化 | 2.87 | 0.64 | 3.73 | 0.58 | *** |
| | 4.資料・教具・機器等の準備, 板書計画の立案 | 3.08 | 0.63 | 3.85 | 0.62 | *** |
| III 学習指導と評価 | 1.音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ | 3.25 | 0.79 | 4.08 | 0.58 | *** |
| | 2.受容的, 応答的な姿勢 | 3.31 | 0.57 | 3.87 | 0.49 | *** |
| | 3.生徒の反応への適切な応答 | 3.00 | 0.72 | 3.73 | 0.56 | *** |
| | 4.資料・教具・機器等の活用, 効果的な板書 | 2.86 | 0.59 | 3.59 | 0.58 | *** |
| | 5.授業中および授業後の適切な評価活動 | 2.76 | 0.44 | 3.46 | 0.52 | *** |
| IV 生活指導と生徒理解 | 1.生活場面での生徒との関わり | 3.62 | 0.89 | 4.48 | 0.45 | *** |
| | 2.学級指導および教室環境への配慮 | 3.50 | 0.75 | 4.14 | 0.57 | *** |
| | 3.観察に基づく個と集団の課題把握 | 3.18 | 0.61 | 3.83 | 0.54 | *** |
| | 4.道徳・特別活動への参加 | 3.50 | 0.90 | 4.06 | 0.66 | *** |
| V 勤務態度と実習への意欲 | 1.出勤の状況(無断欠勤, 遅刻等) | 4.83 | 0.45 | 4.92 | 0.11 | ** |
| | 2.指導案・日誌等提出物の提出状況 | 4.33 | 0.70 | 4.52 | 0.49 | * |
| | 3.協同的な姿勢・コミュニケーション力 | 3.99 | 0.77 | 4.36 | 0.49 | *** |
| | 4.人権等への配慮と規範意識 | 4.01 | 0.66 | 4.21 | 0.53 | * |

(n=144 ***は $p<0.001$, **は $p<0.01$, *は $p<0.05$ を示す)

Iの「3.興味・関心に応じた教材の開発・工夫」において平成20年度では4.08, IIの「1.本時の目標と評価の明確化」において平成20年度で4.01, IIIの「1.音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ」において平成20年度で4.17, IVの「1.生活場面での生徒との関わり」において平成20年度で4.62, 平成23年度で4.48, 「2.学級指導および教室環境への配慮」において平成20年度で4.32, 平成23年度で4.14, 「4.道徳・特別活動への参加」において平成20年度で4.06, 平成23年度で4.06, Vの全観点では両年度とも評価が4点以上と高く評価している。

実習校での指導教諭の適切な指導により, 中間評価時に評価が低かったIIの1.「本時の目標と評価の明確化」の評価が, 平成20年度では3.26から3.94へ, 平成23年度では3.26から

3.94へと両年度とも大きな伸びを示している。Iの3「興味・関心に応じた教材の開発・工夫」を含む中間評価時に評価が低かった評価観点でも, 平成20年度は3.24から4.08へ, 平成23年度は3.13から3.90へと評価が高くなっている。これらのことから, 実際の授業を経験し, 問題点を指摘され, 丁寧な指導を受けながら授業構成に関する実践力が高まっていったことが理解できる。

III. 学習指導と評価の各評価観点においても, 中間評価時と最終評価時を比較すると, どの観点でも着実に伸びを示している。これらの項目も実際に生徒を対象として授業を行わないと学ぶことができないものであり, 現場の先生方の適切な指導のたまものである。この中で, 「音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ」と「資料・教具・機器等の活用, 効果

的な板書」については、教科教育の授業や事前指導においても指導可能な事柄であり、今後の検討を要する指導内容である。

しかし、ここで高く評価されるようになった「Ⅳ. 生活指導と生徒理解」に関わる評価観点は、教育現場で実際の生徒を前にしたり、生徒の中に入って交流してみなければ経験したり確認したりすることができないものであり、大学で事前に練習することができないものである。予備的な知識として授業において学生に伝えることはできるが、本実習においてしか経験できないことだろうと考える。

③自己評価に関する考察のまとめ

評価項目のⅠ. 教材研究、Ⅱ. 指導計画の立案、Ⅲ. 学習指導と評価に関しては、教育実習に行く前に大学での授業においても指導・学習できる内容であり、保健体育科教育法や模擬授業に関わる授業、教育実習事前指導の内容や方法を検討・改善することで対応できる項目である。しかし、項目Ⅳ. 生活指導と生徒理解に関しては、教育実習の現場で実際に生徒を前にして経験しなければ学習することができない内容であり、保健体育科教育法の授業や事前指導の時だけでなく、教職に関する授業においても積極的に努力するよう確実に伝えていかなければならない項目であろう。

教育実習での3週間については、1週目を授業の枠組みづくりと授業運営（マネジメント）ができるようになる期間、2週目を授業の中味づくり（適切な教材提示）ができるようになる期間、3週目を全体指導と個別指導・評価ができるようになる期間であると捉えて、現場で長年教育実習生を指導してきた（柴田，2008a,b）。この考え方から見ても、ここでの自己評価の結果は予想通りのものであり、前章での回答の検討で明らかになったことも同様である。

教育実習において、始めから自分のねらい通りに授業が上手にできるわけではなく、数々の失敗を積み重ねながら、そこでの学び

を生かして少しずつ進歩していくということを理解させることが重要であり、そのための基礎として授業構成に関する勉強を努力して積み重ねていく必要があることを伝えていかなければならない。

平成22年度から教育実習事前指導の実施形態や方法を大幅に変更したが、自己評価の調査結果からはその成果を読み取ることができなかった。今後の課題であると考えている。

4. おわりに

教員を目指している学生にとって、教育実習とは、教科指導、生活指導など、教員としての基本的な職務を実践できる能力があるのかを試される期間であり、そこでの成果をもとに、教員としての適性が判断される期間でもある。

学生の母校における教育実習であっても、教育実習の現場へ学生たちを送り出すことは、実習校や指導教員から見ればびわこ成蹊スポーツ大学で指導を受けた学生である。そのため、実習において不足している、または、問題があると指摘を受けた事柄に対しては、大学として責任持ってその対応を検討しなければならない。教職に関する科目や教科に関する科目のカリキュラムや指導内容・方法を含めて、その改善の方向性を大学全体で検討するためには、実習における学生たちの学びの実態や自己評価における学生の自己省察の変容を知ることが大切だと考えている。

本研究において、教育実習事前指導の実施形態や指導内容を改善した成果は、学生達の実習での学びに関するレポート（調査）の結果で肯定的に受けとめられていることが明らかになった。しかし、教職や教科に関する科目においてもっと徹底して指導すべき内容があることも明らかになった。学習指導案の作成に関する基礎的な学習項目としての授業構成に関する具体例の指導や実際の学習指導に関する模擬授業の受け持ち時間と経験回数増加、保健の授業に関する幅広い領域の指導

内容や方法の指導と多くの模擬授業の実践、実技の授業における集団行動や初心者指導法と教材開発法の指導等であり、教育実習事前指導以外に改善しなければならない課題である。さらに、実習校から送られてくる実習評価票の総合所見で指摘されている問題点を改善するためにも、教職に関する科目や教科に関する科目としての実技教科、模擬授業関連科目、教育実習事前指導を含むカリキュラム改善などの多くの内容を今後継続して検討していかなければならないと考えている。また、本研究で行った調査に関しても、改善された授業内容の有効性を明らかにできるように工夫して、毎年継続して実施していかなければならないと考えている。

【引用・参考文献】

- ①びわこ成蹊スポーツ大学 (2012) 教職ハンドブック. pp.1-8.
- ②小林宏己・坂井 祐・高原 学・橋本美保・柴田俊和・鎌田和宏・白間正博・中村昌子・谷本直美・矢嶋昭雄・京極邦明・鈴木健一・石川直美・坂井英夫・山根正博 (2004) 教育実習の実施形態と評価に関する研究. 平成15年度東京学芸大学教育改善推進費による特別開発研究プロジェクト研究報告書. pp.162-173.
- ③松田恵示・柴田俊和・瀧澤政彦・高橋直樹・板村邦弘・山本浩二・上野佳代・彦坂秀樹・佐藤善人・塚本博則・鈴木 聡・原田純二・原祐一 (2007) 教師の成長モデルと現代的課題から見た実践的力量を形成する体育科の教員養成プ

ロジェクト報告書. 平成18年度東京学芸大学教育実践研究推進機構特別開発研究プロジェクト報告書. pp.28-30.

- ④文部科学省 (2012) 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について. 中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会答申, pp.1-27.
- ⑤柴田俊和 (2007a) 教員養成の基幹大学にふさわしい教育実習をもとめて－附属学校の立場から－. 平成19年度東京学芸大学教育実習フォーラム「附属学校における教育実習の現状と将来」のパネルディスカッション資料
- ⑥柴田俊和 (2007b) 「授業力」を磨くことで「教師力」は高まる. 体育科教育55-9. 大修館書店: pp.26-29.
- ⑦柴田俊和 (2008a) 教育実習を通して身につける体育教師の授業力. びわこ成蹊スポーツ大学編 スポーツ学のすすめ. 大修館書店: 東京, pp.58-60.
- ⑧柴田俊和 (2008b) 教育実習を成功させる5つの心得. 体育科教育56-4. 大修館書店: pp.32-35.
- ⑨柴田俊和・古川雅里子 (2008c) 教育実習における学生の学びと自己評価の現状及び課題. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 第6号: pp.157-173.
- ⑩東京学芸大学教育実践研究支援センター教育実習指導部門 (2007) 教育実習の手引き. 東京学芸大学: p.1, pp.7-35.
- ⑪東京学芸大学 (2007) 附属小学校・中学校・高等学校用教育実習日誌. p.41.

資料1

教育実習 自己評価票

| | | | |
|------|------------|-------|-------------------|
| 実習生 | コース | 学籍番号： | 氏名： |
| 実習校 | 県 | 学校 | 担当： 学年 組 |
| 実習期間 | 平成24年 月 日～ | 月 日 | 出席： 日／欠席： 日／遅刻： 回 |

- 記入方法 ・教育実習期間の中間と最終に2回評価する。(評価日を記入)
 ・各観点を5段階で評価する。(優：5 ← 普通：3 → 劣：1)
 ・その時点で評価できない観点は、評価欄(5-4-3-2-1)を斜線で消す。
 ・空欄には、自分に適した観点を追加記入してもよい。

| 評価項目 | 主な観点 | 中間(月日) | 最終(月日) |
|-------------------------|-------------------------|-----------|-----------|
| I 教材研究 | 1.教科書等の分析・活用 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 2.学習指導要領および学校指導計画等の検討 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 3.興味・関心に応じた教材の開発・工夫 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 4.単元設定理由の明確化 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 5.教科内容に関する専門性 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 6. | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| II 指導計画の立案 | 1.本時の目標と評価の明確化 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 2.目標に応じた学習指導過程の構想 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 3.発問・助言等と反応予想の明確化 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 4.資料・教具・機器等の準備、板書計画等の立案 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 5. | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| III 学習指導と評価 | 1.音声・言語・文字等の明瞭さ、正確さ | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 2.受容的、応答的な姿勢 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 3.生徒の反応への適切な応答 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 4.資料・教具・機器等の活用、効果的な板書 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 5.授業中および授業後の適切な評価活動 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 6. | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| IV 生活指導と生徒理解 | 1.生活場面での生徒との関わり | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 2.学級指導および教室環境への配慮 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 3.観察に基づく個と集団の課題把握 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 4.道徳・特別活動への参加 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 5. | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| V 勤務態度と実習への意欲 | 1.出勤の状況(無断欠勤、遅刻等) | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 2.指導案・日誌等提出物の提出状況 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 3.協同的な姿勢・コミュニケーション力 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 4.人権等への配慮と規範意識 | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| | 5. | 5-4-3-2-1 | 5-4-3-2-1 |
| 成果と課題 *箇条的に簡潔に記入 | (中間) | (最終) | |
| | | | |